

Someone from the Past
1958
by Margot Bennett

目次

過去からの声

5

訳者あとがき 329

解説 横井 司 333

主要登場人物

- ナンシー・グラハム……………作家志望の記者
サラ・ランブソン……………雑誌編集長。ナンシーの親友・元同僚
ドナルド・スペンサー……………画家。サラの元恋人
ピーター・アボット……………サラの元恋人
ローレンス・ホプキンス……………ナンシー、サラの元同僚
マイケル・フェンビイ……………俳優。サラの元配偶者
チャールズ・レスター……………サラの婚約者
クルー警部……………ロンドン警視庁の警部
ダルシー……………ローレンスの同居人
ストーニー……………ナンシーの友人
ジョージ……………詩人。ナンシーの友人

過去からの声

「これ以上シャンパンを飲んだら、とんでもないことになりそうだな」ドナルドが言った。

「今夜の調子では、そんなことにはなりそうもないけど」わたしは答えた。

「試してみようか」

「シャンパンのコルクみたいに、頭のとっぺんをワイヤーでくくりつけておいたほうが良かったかもね」

「頭のとっぺんなんて吹き飛ばしてやるさ。ナン、話したいことがあるんだ」ドナルドはそう言っ
身を寄せ、わたしの手を取った。

相手の指の動きを感じながら、わたしはドナルドの日に焼けて上気した顔の向こうを見つめていた。
業務用ドアのそばにたむろして、おしゃべりをしているウェイターたち。格子細工の囲いの中でとま
り木にとまっている中国の鳥たち。その鳥たちにはいずれ、悲しい運命が待っているのだろう。やが
て、温かかったドナルドの手が、死を予感したかのように冷たくなった。彼はもはや、わたしなど見
ていなかった。レストランの斜め奥を見つめている。

わたしは首を巡らせた。

店の奥から、彼女が手を振っていた。

手を振り返すのに、ドナルドの手から自分の手を引き抜かなければならなかった。手を下ろしたとき、わたしにはまだ、撤退するための時間が残されていたのだ。正しいときに正しいことをすれば、人はみな、違う人生を生きることが出来る。ちっぽけな体裁など、失うもののほんの一部でしかない。彼女は一緒にいる男に声をかけて立ち上がり、わたしたちのほうへ近づいてきた。彼女がテーブルのそばに立つ。そこで、撤退の可能性は失われた。

「こんばんは、わたしの大好きなお友だち」彼女は声をかけてきた。

ドナルドは立ち上がらなかつた。片手をテーブルの上に乗せたまま、自分の指先を見つめている。見知らぬ女に声をかけられた男のふりとしては上等だ。それからやっと、彼は言葉を返した。

「ダーリンだって？」

「ちよつとしたものの言い様じゃない」

「きみにとつては新しいものの言い方というわけだ」ドナルドは皮肉っぽく振る舞おうとしていたが声が震えていた。サラは、昔の秘密めいた楽しみを分け合おうとでもするかのように、わたしに微笑みかけてきた。

ドナルドに微笑んでいるわけではなかつた。

「ここが、あなたたちの特別な、ちよつとした場所なの？」特別なちよつとした場所が、いつも安っぽい店なのを知っているかのような口ぶりだ。

「特別な、ちゃんとした場所だよ」ドナルドが答える。

「じゃあ、二人で何かのお祝いをしているのね？」

「サラ、座つたら？」わたしは素早く口を挟んだ。誰かが言うべきことだったからだ。

「ありがとう、ナンシー」心からの親しみをこめた声だった。

ウェイターが、椅子とグラスとボトルを持って駆け寄ってくる。

「結婚することを伝えたかったの」サラは言った。三秒では慰めのためには長過ぎる。そういった類の間が四秒。

「誰と？」わたしは尋ねた。

「チャールズ・レスタマーという人」

「何をやっている男なんだい？」ドナルドが重ねて問う。

「あなたの幸せに乾杯しなきゃ」

「きみの会社の幸運にも」とドナルド。彼はわたしのことなど見ていなかった。わたしには、ドナルドに対する影響力などかけられない。彼がグラスを掲げ、酒を一口飲んだのを見てほっとした。彼はサラに微笑みかけている。決して気持ちのいい笑みではなかったが、危うい状況を改善するためには、多少なりとも役立つものだった。

「ありがとう、二人とも。そろそろチャスのところに戻らなきゃ。でも、ドナルド、一つだけお願いしてもいいかしら？ 一分でいいの、ナンシーと話がしたいのよ」

「安物の煙草でも買いにいってくるよ」ドナルドは答えた。「ここでは売ってくれないからな」

サラは店を出ていく彼を見つめ、わたしは彼女を見つめていた。二十八歳のサラは、以前よりもずっと自分の外見に合った服装をしていた。初めて会ったときの彼女の姿をよく覚えている。美しい顔をしかめ、真っ赤に塗った唇を不満げに尖らせて、大きな姿見の前に立っていたのだ。そのときの彼女は二十二歳だったが、少なくとも二つは年上に見えた。まるで、人生をすっかり経験してしまった

ような顔をしていた。もちろんそれは、わたしが経験したような人生ではない。そのときのわたしにはまだ、恋に落ちたことなど一度もなかったのだから。ケルンの裏道まで追いかけてきて、起こされた住人たちに窓から罵声を浴びせられるまで、「ナンシー、ナンシー」と傷心の雄牛のようになり立てていた弁護士事務所の男はいた。父が行きつけの店を変える決心をするまで、毎夜、わたしにバラの花を贈り続けた斜視気味のオランダ人バーテンダーもいた。でも、そんな出来事を恋愛とは呼びたくない。純粹で、着るものも慎ましく、経験もまったくなかった二十歳の娘にとつて、それはただ、恐ろしいことではなかったのだから。

サラと初めて会ってから六年になる。彼女は前よりもきれいになった。外見的な美しさも増しているが、内面的にも経験を積んできたのだろう。しかし、その外見と内面のあいだには、今もまだわずかに深い傷跡が残っている。恋愛に苦しんできたという、ありがたくない証だ。

ドナルドがドアを抜けるのを見届けると、サラはわたしに顔を向けた。

「数年ぶりね、ナンシー」

「九カ月ぶりよ」

「以前はずいぶん仲良くしていたものね。あなたは、本当にいろんなことを教えてくれたわ」

「わたしが？」

「いつだって、閃きと意見に溢れていたじゃない。詩にも詳しくあったし」

「いいえ、ちっとも。わたしのこと、物書きか何かみたいに言ってくれるのね」

「違うの？」

「ひよっこ以下よ」

「じゃあ、今はどういう状況なわけ？」

「物書きの卵っていうところかな。あなたもそうなりたいの？」

「わたしたちが前に、どんなことを話していたのか忘れちゃったの？」

「わたしたち、よく笑っていたわね。今ではそれも難しいわ……ドナルドと関わっていると」

「それなら、わたし、話せる人が誰もいなくなってしまうわ」サラは振り向いて、先ほどまで座っていたテーブルをちらちらと窺い始めた。

「今は何をしているの、ナンシー？」まだ、ぐずぐずと同じことを尋ねてくる。

「書いているわよ」

「それだけ？」

「ほとんどね」

「前は何でも話してくれたじゃない。それに、互いに助け合ってきたわ」

サラはわたしに微笑みかけた。期待を込めたような、半分恥じているような、どこか懐かしい笑い方で。その笑みが不意に、過去のある晩のことを思い出させた。泣き続ける彼女をあげ放った暗い窓辺に残し、ロンドンのウエスト・ワン地区をタクシーで走り回った日のことだ。マイクが飲んでいそうなパブを十軒も訪ねて回った。そして、その男を彼女の元に連れ戻す前に、彼の怒りをすべて吐き出させようと、エンバンクメントを二時間も連れ回したあの日。

「サラ、わたしに何をしてほしいの？」彼女はすぐに意を決したようだ。

「何だと思う？」そう尋ねてくる。

「ヒントが必要だわ」

「過去からの声」

「わたしを知っている人？」

「ええ、もちろん」

「好意的な声なの？」

「いいえ」サラはきつぱりと否定した。

「ローレンス？ ピーター？ マイク？」一人一人の名を挙げながらじつと観察していたが、サラの顔は何も漏らさない。

「男だなんて言った？」

「言う必要があったでしょう？」

「わたしには、何も言う必要なんてないわ。あなたなら興味を持つだろうって思っただけよ」

「どうして？」そう尋ね返す。それはかつての、秘密めいた過去の迷宮や憶測、そして最後には笑いへとなだれ込んでいったのと同じ種類の会話だった。

「だって、あなたはいつも人のことに興味津々なんだもの」

「でも、人って同じことを繰り返すから、そのうち興味も薄れていくのよ」

「これは繰り返したんかじゃないの」

「サラ、本当は心配なことがあるんじゃないの？」

「ええ、たぶん。でも、何でもないことなのかもしれない」

「その、何でもないことっていうのを説明して」

サラはシャンパングラスを取り上げると、素早く一口すすった。

「説明してみるわ。過去からの誰かが、わたしを殺すつて脅しているの」彼女は努めて冷静に話そうとしていたが、口元がかすかに歪んでいた。以前、わたしに恐ろしいことを話そうとするときには、必ずそうしていたように。でも、だからといってそれが、脅えていることの証にはならない。彼女はあらゆる意味で単純な人間ではないからだ。大袈裟なことが大好きで、口元を歪めるふりをする事なんて、お茶の子さいさいなのだ。

「わたしが言っていることの意味を考えて、時間を無駄にしないで」サラは続けた。「わたしが言いたいのは、その言葉のままよ。過去からの誰かが、わたしを殺すつて脅しているの」

「警察に行かなきゃ」

「嫌よ」

「どうして?」

「だって、わたしはチャールズと結婚する予定で、誰にもわたしを止めることなんかできないからよ。離婚が成立するまでものごく待たされて、やっと彼と結婚できるんだから。ナンシー、わたしたち、ハネムーンでジャマイカに行くの。ジャマイカ行きは、わたしの夢の一つだったのよ」

「夢の国で甘いものを食べ過ぎないでね」

「夢の国なんかじゃないわ。これは現実。あるいは、ほぼ現実なの。でも、わたしたちのフラットに警察がやってきたりしたら、彼に知られてしまう」

「何を?」

「彼が今、知っている以上のことを」

「あの人は何も知らないの?」

「大事なことは何も」

「シテイ(英国の金融街)では、余計なことに関心を持たないものね」

「彼が、わたしたちの知人と知り合うこともないし。わたしがマイクと結婚していたことは、彼も知っているわ」その人物の名前を口にしたとき、サラの声は感傷的だったが、脅えている様子はなかった。それで、脅迫者がマイクだとは思っていないことがわかった。

「チャールズにほかの人たちのことも話すべきね」わたしは、そう勧めた。「彼がよそで知ったりしたら、決まり悪いでしょ？」

「あの人に知られることはないわ。わたしたち、ほかの場所に移る予定だから」

「メイデンヘッドとかドービルに？」私は言い、笑い声を上げた。「メイデンヘッドにはピーターがいるわよ。あのピーターがメイデンヘッドで何をしているのかしら？」サラの顔からは何も窺えない。「ピーターなの？」わたしは尋ねた。

サラは眉根を寄せ、小さく首を振った。

「わからない。手紙が届いたのよ。タイプ打ちだった。ほかにも届いていたんだけど、破り捨ててしまった。もし良かったら、直近の手紙をあなたに郵送するわ」

「ええ。ほかの手紙と内容は同じ？」

「みんな同じ。言葉は違っても、内容はみな同じだわ。この七、八週間で五通くらい受け取っているの。でも、二日前に一通受け取って、今朝、もう一通。届くペースが早くなっているのよ」

「わたしにどうしてほしいの？」

「わたしのために全員と会ってみてほしいの」彼女は立ち上がった。「ああ、ドナルドが戻ってきた

〔著者〕

マーゴット・ベネット

1912年、スコットランド、レンジー生まれ。広告のコピーライターとして務め、1945年「Time to Change Hat」で小説家としてデビュー。「飛ばなかった男」(55)でCWA最優秀長編賞ノミネート。翌年、本作「過去からの声」(58)でCWA最優秀長編賞を受賞。80年死去。

〔訳者〕

板垣節子（いたがき・せつこ）

北海道札幌市生まれ。インターカレッジ札幌にて翻訳を学ぶ。訳書に『J・G・リダー氏の心』、『ラスキン・テラスの亡霊』（いずれも論創社）、『薄灰色に汚れた罪』（長崎出版）、『ラブレスキューは迅速に』（ぶんか社）など。

かこ ころ
過去からの声

——論創海外ミステリ 198

2017年11月20日 初版第1刷印刷

2017年11月30日 初版第1刷発行

著者 マーゴット・ベネット

訳者 板垣節子

装画 佐久間真人

装丁 宗利淳一

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1654-8

落丁・乱丁本はお取り替えいたします